のぞいてみよう！せんだいの歴史　ゆかりの絵画編

江戸のラクダブームとリアルな駱駝図

第18回

仙台市博物館　学芸普及室　大内 直輝

今回は、菊田伊徳（一七八五～一八五一）の「駱駝図」を紹介します。

江戸の一大ラクダブーム

江戸時代後期、ラクダは日本の人々を熱狂させた舶来動物でした。

文政四年（一八二一）7月、オランダ船に乗って、アラビア産（イラン産とする説もある）の雌雄のヒトコブラクダが長崎に渡来しました。このラクダは、その後10年以上、見せ物として江戸や大坂をはじめ各地を巡り、大変な評判となりました。当時は、ラクダに関する浮世絵や絵入り版本のほか、ラクダの土人形まで売り出されたといいます。この一大ラクダブームの中で、絵師たちもラクダの写生画を制作しました。今回紹介する「駱駝図」もその一つです。

リアルな「駱駝図」

本図は、無地の背景に、向かい合う2頭のヒトコブラクダを描いたものです。作者の菊田伊徳は、仙台四大画家の一人菊田伊洲のいとこにあたり、仙台藩のお抱え絵師として、12代藩主伊達斉邦、13代藩主伊達慶邦に仕えた人物です。落款には「文政七年九月、伊徳写生」とあります。この年紀が、文政七年8月から翌春にかけて行われた江戸での興行と時期が重なることから、伊徳は江戸で実物のラクダを見物し、本図を制作したと考えられます。

本図の描写は精緻です。写真では分かりづらいですが、体毛は毛の一本一本まで細かく丁寧に描かれています。体毛の濃さも濃淡のグラデーションにより陰影をつけることで、立体感を表現しています。また、太い眉毛や脚にできた座りダコなど、ラクダの体の特徴もよく捉えており、伊徳の観察眼の鋭さが感じられます。なかなかにリアルで、少し生々しさすら感じる作品です。

では、この絵はどのような目的で制作されたのでしょうか。本作は、仙台伊達家に伝来したものです。もしかしたら、ラクダブームの中で、見せ物を見に行きたくても行くことが難しい藩主も、ラクダを楽しめるように描かれたものなのかもしれません。想像が膨らみます。

今回紹介した作品は仙台市博物館ホームページの「収蔵資料データベース」からご覧いただけます。

太い眉毛

脚にできた座りダコ

「駱駝図」　菊田伊徳筆　文政7年(1824)　仙台市博物館蔵